The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	碩園西村先生の略歴
Author(s)	
Citation	懐徳. 1925, 2, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88699
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

碩園西村先生の略歷

先生は慶應元年七月二十三日、鹿兒島縣熊毛郡北種子村西の表なる士族西村城之助氏の長男として生れ給へり。

慶應三年七月九日、不幸にして嚴君を失はれ、以後は專ら慈母淺子刀自の手によつて養育せられ給ふ。先生時に纔に三歲。幼にして鄕儒、前田豐山先生の門に入り漢學を學ばれしが、明治九年よりは種子島學校に入られたり。

明治十三年四月よりは東京に出でて、重野成齋、島田篁村の二先生に師事され、學業大に進む。明治十三年、東京大學古典講習科漢學課に入學されしが、同二十年には故ありて中途退學せられたり。

明治二十二年五月に至つて大阪朝日新聞社の招聘に應じ、入社せられしが、同二十五年、福島少佐が有名なるシベリヤ單騎旅行を終へて、浦鹽に歸着するや、先生は大阪朝日新聞特派記者として同地に赴かれ、少佐より親しく旅行の經過を聽取して、大朝紙上に百餘回に亘れる紀行文を掲載されしは今も一部の人の記憶に新ならむ。

明治二十七年、朝鮮に東學黨の亂起るや、先生は卒先して京城に入り、日清戰爭勃發前に於ける日韓清三國の關係を報道するに努められたり。

明治三十年、東京朝日新聞の主筆となられ、同三十一年冬、清國に遊び、翌年歸朝せらる。

明治三十二年の冬、再度清國に遊ばれ、在留二年有餘、同三十五年春に至つて歸朝されしがこれより先生の性行一變せりといふ。

明治四十三年、歐米諸國を巡遊せらる。

大正五年、先生等の盡力によつて懷德堂の重建さるるや、先生は懷德堂理事並に講師を兼ねらる。これより前、先生は大阪人文會席上に於て舊懷德堂先儒五井蘭洲先生の功績を闡揚され、大阪人士を感奮せしめられしが、これが動機となり、遂に資を集め、堂の先賢を祀り、以て財團法人懷德堂の組織を見るに至れり。先生の講師たるや、常に孔孟の道を以て時弊を矯めんことに力を致されたり。

大正五年九月、京都帝國大學文科大學講師を囑託せられ、楚辭其他を講義せられしが、同九年三月に至つて辭されたり。

大正八年五月、大阪朝日新聞社を退かる。先生の同社の爲に盡されし事、實に三十二年、其間に日本宋學史、學界の偉人、南島偉功傳、懷德堂考、尾張敬公等の著述あり。退社の後、楚辭、尙書の研究に沒頭せられ、其稿も略成れり。

大正九年五月、文學博士の學位を獲給ひ、次で同年の六月、公爵島津家臨時編輯所編纂長となられたり。

大正十年八月三十一日、宮內省御用掛(勅任待遇)を仰付けられ、其間傍ら宮內省同僚の爲に論語を、島津公爵令嗣忠秀君の爲に孝經及び日本外史を、又島津公爵家職員の爲に唐鑑を講せられたりしといふ。而して一方又大東文化學院にも講師たりき。

大正十二年九月二十日、正五位に叙せられ、同十三年一月十日、御講書控を命せられ給ふ。

大正十三年七月二十九日、先生危篤の報、天聽に達するや、畏くも從四位に叙せられ、翌、七月三十日更に勳四等に叙し、瑞寶章を授けられ給へり。

大正十三年七月三十日、先生逝去、享年六十歲にておはしましき。